

日本の仏教における教学の近代化とは何だろうか。それは開宗以降、連綿と受けつがれてきた祖師の思想を、近代という時代に則した内容に会通するということになる。その場合、教学を時代に引き寄せて読み替えていくのか、それとも教学内容を決して損なうことなく、時代の価値観を変換させるように試みていくのかということになるであろう。前者は教団内部の転換であり、後者は社会の転換である。当然、社会的価値観を教学によって変化させるほうがはるかに困難な作業だが、双方に共通していることは、西欧化されていく近代思想に敏感に反応しつつ、そうした知識を理解吸収し、依って立つ教学、つまり宗派性の強い日本の祖師仏教の中に普遍性を見出し、いかに広く社会へ展開していくかという問題を考えていたということになるであろう。ただし、普遍性を追求するために、西欧思想を借りなければならぬという不可思議な関係があり、伝統教学を相対化するという作業を踏まえなければ答えが見つからない場合があったのではないだろうか。

日蓮仏教の場合、包括主義ゆえの排他性のために、こうした思索は殊更困難に思える。固有性が絶対であり、名指されたときにこそその価値を持つのであれば、普遍性を追求すること自体が宗派性の喪失、日蓮仏教が日蓮仏教たる所以を失うということになるからである。

近代日本に見られるこうした葛藤は、現代における日蓮宗の礎を確立した、近世の教学者・優陀那院日輝（一八〇〇～五九）の著書にすでに確認されている。また、教学の近代化は、教団という伝統的組織内で主要な役割を持つ僧侶だけでなく、日蓮の生き方に傾倒し、信仰を深めていく在家信者の中にも見出されるものであった。文芸評論家の柄谷行人氏が述べるように、近代における個人の葛藤はその人間の頭にすでに存在する近代的自我によってなされるのではなく、外側の「制度」に対抗する内側の「制度化」であるとするならば、社会制度や価値観が大きく変化した近代において、日蓮信仰は信仰者個人の中で様々に制度化され、時代に対応する形で新しい宗教性を生み出していったといえよう。

本発表では、近代社会という教学の周縁に適応するように、あるいは抗うように個の制度化を謀りながら、伝統教学を継承していく様相を、近代における日蓮仏教のカリスマである田中智学を中心に、何人かの日蓮信仰者について確認していきたい。

キーワード：日蓮仏教、教学の近代化、社会活動・運動